

「沖縄」考える機会に

「太陽の子」は一九七〇年代、神戸の沖縄料理店が舞台。店を営む沖縄出身の両親を持つ女の子「ふうちゃん」が、先の大戦の沖縄戦で心の傷を負った父や手りゅう弾で片腕を失った男性ら、店に集う沖縄出身者を通じ沖縄と戦争を知り、困難を乗り越えて未来に進む成長物語。

沖縄文化の美しさを表現する。佐藤さんは「テーマは重たいが、楽しいところもある」と紹介する。

三時間に及ぶ「太陽の子」を上演するのは九年ぶり。毎秋、社会派劇を上演しているが、今年は創立四十五年、けいこ場建設十年を記念し、この大作を選んだ。当初、任期満了による沖縄知事選が十一月に行われることも見込んでいた

ふうちゃんを演じる市内の大学一年、北谷多嬉さん(584) 3436へ。劇団「ひの」電話042

小中学生を含む団員二十一人が出演。団員たちは八月から週二回、けいこを重ねてきた。「自分のことのように胸が痛む」という意味の沖縄の言葉「ちむべりさ」が使われ、沖縄戦の悲惨さや沖縄への差別を描く。一方で、プロから沖縄の歌と踊り、三線の指導を受け、子どもたちの踊りで

団員に戦争体験者はおらず、九月には沖縄の話と歌を聴くプレイベントを催し、団員自身が勉強した。

(こは)「ふうちゃんと一緒に学んで、感じたことを伝えたい」と意気込む。前売り券千五百円(当日千八百円)、学生千円(同千三百円)。問い合わせは

日野市のアマチュア劇団「ひの」は12月1～16日に計10回、同市日野のけいこ場で、沖縄をテーマにした「太陽の子」を上演する。沖縄県名護市辺野古への米軍普天間飛行場の移設を巡り県と国が対立するなか、演出の佐藤利勝さん(62)は「沖縄の問題を人ごとと思わず考える機会にしてほしい」と話している。(松村裕子)

戦争被害、差別、歌と踊り…

日野の劇団「ひの」、「太陽の子」上演 来月1～16日



公開げいこで熱演するふうちゃん役の北谷さん(中央)＝日野市で